

ドイツ文学わき道散歩(11)

フランスの文庫本に“Que sais-je?(クセジュ)”というシリーズがある。16世紀の思想家モンテーニュの「私は何を知っているか」という言葉に由来し、知の探求を目指す同文庫に似つかわしい名前である。知識を追い求める思潮は、モンテーニュの時代からおよそ2世紀を経て、“自己教化”とでも言うべき教養についての理想を掲げた。貴族社会のみならず市民階級、ひいてはユダヤ人社会でも教養ある人こそが尊敬に値する、という考えは、やがて啓蒙主義思想を時代の波に乗せていく。

G.E.レッシングはこの時代を代表する劇作家で、ドイツ啓蒙主義文学の完成者と呼ばれている。代表作『賢人ナータン』は、エルサレムを舞台に、ユダヤ人豪商ナータンの屋敷が火事に遭い、その娘の命を回教(イスラム)王に恩赦を与えられたキリスト教の神殿騎士が救う、という何とも複雑な場面から始まる。親子関係、恋愛、さまざまな様相を呈した作品であるが、この戯曲の最大のテーマは宗教の壁を越える人間愛と言えよう。個人的にナータンの姿には、20世紀の作家シュテファン・ツヴァイクを重ねずにいられない。同じ裕福なユダヤ人ということだけではない。1942年、ツヴァイクは亡命の地ブラジルで日本による真珠湾攻撃の報を聞いた翌日に自ら命を絶ったのだが、彼の人類愛を訴えた平和に対するユダヤの思想にどことなくナータンと共通するものを感じるからである。

ところでユダヤ人の迫害と聞くとすぐにナチスを連想してしまいがちだが、実際はナチスが台頭するずっと前から反ユダヤ主義は“ドイツ人”に根深くあった。けれどもこれは別のお話、ユダヤ人として“祖国”ドイツを憂えた『ドイツ・冬物語』の詩人についてはまた次の機会にお話ししよう。

1999年度ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり

インターミッション 15

石田晴久 著 「インターネット安全活用術」 (岩波書店)

インターネットは近年の安価な定額制高速ブロードバンドの普及により、今や日本人の半数以上が利用するものとなりました。利用の仕方でも情報の検索だけでなく、ショッピング、旅行などの予約、株取引、ドラマやスポーツ中継の視聴など多岐に渡るようになっていきます。さらに現在では、パソコンだけでなく携帯電話においてもインターネット機能技術の急激な進歩が進んでいます。皆さんの中にもインターネットが完全にライフスタイルの一部となっている方も多いのではないのでしょうか。

しかしこのように利用が増え、ますます便利になっていく中で、様々なインターネットが抱える問題点、危険性も多種多様化しています。特にセキュリティと倫理面の問題は深刻であり、個人情報が出しつたり著作権、肖像権などの各権利が脅かされる危険性が高まっています。

本書ではインターネットが元来持つ利便性をはじめ、コンピュータ・ウィルス、パソコンへの不正侵入、個人情報漏洩など具体的にインターネットが引き起こす様々な社会問題やインターネット社会で自分の身を守る方法などを取り上げ、インターネットを利用する人がその利便性と危険性を理解する事が出来る内容となっています。

インターネットは便利なものですが、その利便性の裏に潜む危険性をしっかりと認識しておかなければ、いつ何時「被害者」になるかもしれません。またインターネット上でのマナーやモラルを理解していなければ、無意識のうちに「加害者」にもなりかねないのです。皆さんが安全に快適にインターネットを利用していただくためにも是非一読して頂きたい1冊です。

(管理運営課 宮杉 浩)